2020 親子で学ぶ平和学習資料

私の戦争体験 第42集

おじいさんやおばあさんが体験した
大切な大切なお話の数々

巻頭特集　P 2
「私の戦争体験」アーカイブのご紹介

小学校時代すべてを戦争に費やされた自分　石井 トリヲ　P 4
「おいしい」は命の喜ぶ声　遠藤 幸子　P 7
私の戦争体験　多田 孝子　P10
引き揚げの記憶　宮田 正子　P14
父の遺骨を抱いて　津田 富貴　P17
「後は頼む」と残されて　喜連川 喜美枝　P20

くらしに笑顔お届けします
大阪いずみ市民生活協同組合

小学校時代すべてを戦争に費やされた自分

泉佐野市　石井 トリヲ　86歳

防空頭巾をかぶった子どもたち

南九州のある小さな城下町、全校生徒わずか200余名ほどの農村の小学校、私は2年生でした。ある日、突然尋常小学校から国民学校に改名されたのです。それが大東亜戦争の始まりだったようです。日本は第一次世界大戦の後、負けることのない国だ、強い国だと教育されて参りました。それから3、4年生くらいまでは、大体登校できて普通の勉強が受けられました。その頃から20代30代の男性の人はほとんど召集され、私たちの先生も旧制中学校の学生さんで若かったけれど、何とか授業は受けられました。5年生になると村の若いお兄さん、お父さんたちが召集されて、南の国で「勝って来るぞ」ということでした。

しかし、農家では人手不足、忙しい時期になると子どもたちも登校はままならなくなってきました。お国のためにがんばっておられる男性たちを思えば、子どもだからといって勉強などはしていられなくなりました。私たち学童は休校して各家庭の農作業を手伝うことになりました。小さな子どもなりにみなと一生けんめい働きました。おやつに、いも1個いただくことが最高の楽しみでした。夕方、家に帰ると遊ぶ暇はなし、床下などから古い鉄くず、釘などを探し出し、まとめて学校へと運びました。下校時は道路下の草むらから「ラミー」を根元から折り、持てるだけを持ち、家で皮をむき乾燥させて、まとまったら学校へと運びました。

外国で働く兵隊さんのため、戦闘機の油、落下傘の布、私たち田舎の小学生は勉強よりもほとんどを戦争に勝つためにと働きました。都会のみなさまにご理解いただけるでしょうか。そのうち、私たち田舎にも毎日、空襲警報が鳴り響くようになりました。

白い洋服は緑色に染め、防空頭巾をかぶり、履物はわら草履かハダシ、途中でサイレンが鳴り出し、逃げるように家に帰らざるを得ない日々がだんだん続くようになりました。幾日ぶりか学校にたどり着けたと思ったら、私たちの小学校は戦地に行けず待機中の兵隊さんたちの住み家になっていました。私たちは学校さえも、級友たちと顔を合わせる場所もなかったのです。そのうち、毎日音を立てて敵機が飛来し、当てもなく爆弾を落とし、立派な白壁の家など容赦なく射撃していました。日本はもう何の反撃

尋常小学校
1886年(明治19)小学校令により設置され、満6歳以上の児童に初等普通教育を施した義務制の小学校。期間は最初4年、1907年(明治40)から6年。

国民学校
1941年(昭和16)、それまでの小学校が国民学校に改められた。子どもは、個人の子どもではなく、お国の子どもとして教育され、戦争につながる教育が行われた。

大東亜戦争
太平洋戦争。1941年(昭和16)の開戦から1945年(昭和20)の降伏調印までの日本「大日本帝国」とアメリカ・イギリス・オランダなどの連合国との戦いのこと。

第一次世界大戦
1914年(大正3)から1918年(大正7)にかけて、連合国対中央同盟国の戦闘により繰り広げられた最初の世界戦争。

旧制中学校
小学校を修了した男子の高等普通教育が行われた学校。修業年限5年。

ラミー
イラクサ科の多年草。原野に自生し、高さ1メートル以上に達する。茎の繊維を織物などに用いる。

落下傘
パラシュート。絹製またはナイロン製の傘状のもので、飛行機から人や物資を投下するとき、降下速度を制限するために用いられるもの。

空襲警報
敵軍の航空機による爆撃被害が出ないように、市民に知らせる警報。

防空頭巾
戦時中、空襲などの際に飛来物から頭を守るためにかぶった綿入れの頭巾。

もできない状態だったのでしょうか？都会と同じで我が家のたんぼにも落ちたのですよ。「孟宗竹」が割れるような、耳も張り裂けるようなすごい音でした。それから数日後、珍しく静かな朝を迎えました。久しぶりに学校へ行けるかなと登校の準備をして出かけたら、近所のおばさんが「ラジオ」を聞いていました。「日本は負けたらしいよ」と話してくださいました。そのうち敵機も飛来して、低飛行しながら「戦争は終わりました」とおもしろい日本語で繰り返し知らせてきました。負けたのですね。小学校6年生の夏でした。私たちの小学校6年生は何だったのでしょうか。在学中、何の勉強をしたのでしょうか。

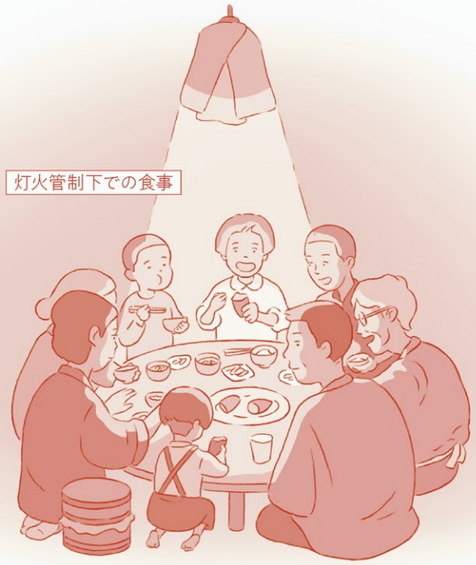
現在、在命中の同年代のみなさん、無知であっても他人様に笑われても恥ずかしいことではありません。すべては戦争ゆえの犠牲であり、我が国の現在の発展にも貢献したのですから。

敗戦直後の人民の貧しい、苦しい生活は、現在の日本の人たちには理解できないと思います。

野菜洗いの手伝い　写真提供：大阪国際平和センター

孟宗竹
大型の竹。日本にある竹では最も大きく、高さ25メートルに達するものもある。

ラジオ（玉音放送）
1945年（昭和20）8月15日正午から、昭和天皇自らが太平洋戦争終結の決定を国民に伝えるために行った録音放送。



灯火管制下での食事

「おいしい」は命の喜ぶ声

八尾市　遠藤幸子　92歳

昭和16年12月8日、太平洋戦争が始まった。私は京都の二条女学校の2年生だった。

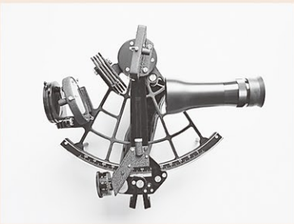
まだ食糧不足の実感はなかったが、学校からは代用食を持参しても良いと言われ、面白半分に、バナナ、さつま芋などを弁当に詰め昼食を楽しんでいた。しかし日に日に、食糧は逼迫していった。

友人たちは田舎の親類から米や芋や野菜を送って来たなどと喜んでいたが、私の両親はいずれも京都生まれ、しかも一人っ子同士なので、私たちには伯（叔）父、伯（叔）母、いとこはいなかった。夏休みなど、泊りがけで田舎へ行って、いとこたちと遊んだという話はとても羨ましく思った。開戦から二年半、昭和19年6月、学徒動員令が下り、全国の中等学校の4、5年生は学業をなげうって軍需工場へ通うこととなった。私の女学校は、島津製作所の分工場となり六分儀を作っていた。この

学徒動員令
第二次世界大戦中、深刻な労働力不足を補うために、中等学校以上の生徒や学生が軍需産業や食料生産に動員されたこと。

軍需工場
武器、弾薬など軍事用の物資を製造、補修する工場。

六分儀
天体上の二点間または二物体間の角度を測る、携帯用の器械。航海や測量に使う。



頃、食糧は極度に不足し、毎日お粥を啜っていた。入浴時、母の肋骨がすけて見えるのが辛かった。

しかし砂糖不足に目をつけた薬剤師の父は、化学書を繙いて、試行錯誤の末、甘味剤の**ズルチン**の製造に成功した。ズルチンは煮炊きしても苦味のないすぐれものだった。母はこれを上賀茂の農家へ持参して米や野菜と交換してもらって来た。ズルチンは我が家の救世主だった。

ある日、食べた芋粥の美味しさに子どもたちは叶わぬ事とは知りながら「いつか一人一本のお芋を食べさせて」とねだった。父は思案していたが、京都府下の寺田村で薬局をしている友人に頼んでみようと電話してくれた。

そして無理を承知してくださったS薬局へ私が行く事になった。その頃学校工場は、材料が入荷せず、作業待ちという日が度々あったので一日休ませてもらうことにした。

約束の日、家族の期待を一身に、**全権大使**のような気持ちで家を出た。京都駅から小一時間、寺田村のS薬局はすぐわかった。お土産のズルチンはご家族に大喜びされた。長らく口にしなかった赤飯と蓬餅を御馳走になり、全権大使の役得を味わった。

パンパンのリュックの重さは幸せの重さだった。丁寧に御礼を言って辞した。次は京都駅の**検問**の突破だ。

ズルチン
人工甘味料。日本では1968年以降、食品添加物としては禁止されている。

全権大使
特命全権大使。外交使節団の長として、国家を代表し、外交の全権を委任されて交渉に当たる。比喩的に、代表としてすべてを任され事にあたる人。

検問
違反や怪しい点がないかどうかを問いただして調べること。当時、非合法に手に入れた食糧などはすべて没収された。

騒然とした京都駅へ着いた。大きなリュックに大風呂敷包みを両手に提げた人ばかり。飛び交う怒号。既に没収されて泣き喚く女たち。

阿鼻叫喚の中、私の番が来た。女学校の制服にもんぺ姿の私は、一世一代の笑顔で、ぺこりとお辞儀をした。「通れ」と手で合図された。天にも昇る心持ちで改札を出た。私を使いに出した両親の意図がわかった。

その夜の**燈火管制下**の晩餐のメニューは忘れもせぬ、ふかし芋一人一本宛、豆御飯、ほうれん草の胡麻和え、じゅんさいの味噌汁。

何という幸せ。家族の腹の底から迸り出た「おいしい！」は命の喜ぶ声だと思った。

京都駅（「絵葉書「大京都」より）
写真提供：立命館大学国際平和ミュージアム

燈火管制下
夜間、敵機の来襲に備え、減光・遮光・消灯をすること。

私の戦争体験

羽曳野市　多田孝子　88歳

B-29による空爆

私は現在88歳になるが、三重県安濃郡神戸村にある国民学校6年の初夏の日の出来事であった。いつものように学校に着くと、まず歩調をとって2、3歩進み、校門の側の天皇皇后両陛下（昭和天皇）の**御真影**が飾られた**奉安殿**に向かって最敬礼をし、それから生徒全員で校長先生から朝礼を受けるのである。棒のようにしか見えない痩せた校長先生の、日本の戦争勝利の話は、毎度長かった。このころになると、田舎といえど栄養不足の子どももいて、時々倒れることもあった。

しかし新学期になって校長先生が変わった。今度の先生は前の先生とは対照的で、でっぷりとしてにこやかで、話も短かった。生徒たちにとってこんなうれしいことはない。だがこの校庭にいる100人ほどの生徒たちも、十何名かの先生たちも、ましてや校長先生も、わずか何時間かあとに起こる悲劇など知る由もなかった。

教室に入って、何時間目かの授業を受けていた時、ぶーぶーという**警戒警報**のサイレンが鳴りだした。いつものこと、生徒たちは急いで机の上の教科書など、カバンの中に手際よくしまい、先生の「気を付けて早く帰りなさい」という言葉を後に、村ごとに上級生に引率されて田舎道をわが家に向かってひたすらに急ぐ。私は6年生、真っ先に村の子どもたちの先頭にたって歩きだしたのだが、2㎞ほどある道の中頃まで来たとき、ふと、あたりを見回すと、誰一人いないのに気が付いた。体の弱い私など、みんなほったらかして、他の上級生について帰ってしまったのだろう。私は心細さと恥ずかしさで泣きそうになりながら、青々と育った稲田の田んぼ道をやっとの思いで家に帰りついた。

それから程なく**空襲警報**が鳴ると同時に、どかんどかんという大音響がして、家そのものが揺れだした。家の外に飛び出してみると、東の空いっぱいに黒煙があがり、近所の人たちも、「学校のほうだ。間違いない」と騒いでいる。

それからが大変だったらしい。**在郷軍人**や（若者は戦争に取られていないので）村にいる男という男はみな、学校に駆け付けた。

学校は、以前は4か村あわせた中心の村の中にあったが「産めよ増やせよ」という国

御真影
高貴な人の肖像画・写真などを敬っていう言葉。

奉安殿
第二次世界大戦中まで、日本の各学校で天皇と皇后の写真（御真影）と教育勅語を納めていた建物。

警戒警報
敵機の空襲のおそれがある場合に出された警報。

空襲警報
敵軍の航空機による爆撃被害が出ないように、市民に知らせる警報。

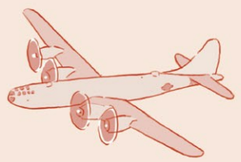
在郷軍人
現役として軍務に服していない軍人。日本では第二次世界大戦が終わるまで、予備役、後備役、退役軍人をいった。

策にそってみなが頑張ったせいもあろうか、子どもの数が増え、生徒を収容しきれなくなり、村の山の上に移転した。眺めも良く、校舎も新しく校庭も広々として本当に申し分なかったが、それがかえって災いして、空爆の対象になったのだろうか。

このころには、潮岬を名古屋方面に北上するB-29が、毎日のように大編隊を組んで北上していた。津の町には軍需工場もあり、近くには連隊もあったが、こんな田舎の小学校が爆撃されるとは誰も思っていなかった。

私たち生徒を家に帰した後、先生たちはいくつか校庭に掘られた防空壕に分かれて避難した。爆音に防空壕から首を出した一人の先生が、「直撃だ…逃げろ」とさけんだ。それで先生方が防空壕から外に出た途端、直撃にあい、肉片となって飛び散った。爆弾はその重力により、斜めに落ちるものらしい。そのまま防空壕の中にいたら、助かったかもしれない。先生方の中でただ一人生き残ったのが校長先生だった。校長先生は御真影がつかえて、どうしても外に出ることができなかった。

各村から学校に駆け付けた男の人たちは、真っ黒に群がる烏から、先生方の肉片を守ろうと死に物狂いで、それをかき集め、石油をかけ、涙ながらにほうむったそうである。終戦後しばらく経ってからわかったことだった。校舎は幸い残ったが学校は当ぶん休みになった。



空爆
「空中爆撃」の略。航空機から地上を爆撃したり銃撃したりすること。空襲とも呼ばれる。

B-29
アメリカのボーイング社が第二次世界大戦中の1942年（昭和17）に完成した長距離用爆撃機。日本本土の軍事施設を破壊するとともに、都市に対する無差別爆撃を行い、戦局に大きな影響を与えた。広島と長崎に原子爆弾を投下したのも同機である。

防空壕
空からくる敵の攻撃に対し、避難するために掘ってつくった穴やみぞ。

御真影を守った校長先生は英雄ともてはやされたが、不本意だったに違いない。あんなにも生徒の負担を考え、朝礼の時間を短くし、いつもニコニコと生徒に接していた校長先生は、部下の先生を全て失い、自分だけ生き残ったことに無念の思いで苦しんでいたに違いない。

それからまもなく日本は戦争に敗れ、英雄だった校長先生は、部下を全員死なせた戦争犯罪者として牢獄に繋がれ、出所後、間もなく亡くなられたということを風の便りに聞いた。

まだ女学校を出たての若いきれいな女の先生や、小さい子どものいる優しいお母さん先生、零をゼロという美男子の音楽の先生などなど、どんなに残念だったことだろう。それからも、山に遊びにいった子どもたちが不発弾にさわって大怪我をしたり、村にもたくさんの戦死者が出た。大阪名古屋はもちろん、津の町も全焼してたくさんの死者が出た。

子ども心にも戦争とは、何というおぞましいことか。絶対にあってはならないことだと思った。

戦争犯罪者
第二次世界大戦後、連合国の軍事裁判で戦争犯罪について訴追、処罰されたもの。

引き揚げの記憶

堺市　宮田正子　86歳

引き揚げのため船に乗り込む人々

明治生まれの父は（旧）泉北郡西陶器の出身です。若い時、**徴兵制度**で軍隊に入り、父の部隊が台湾へ移動になり、そこで除隊となり、皆日本に帰国して行ったのですが、父は次男で日本の国であった台湾で骨をうずめる覚悟で、程なくして愛媛県から来ていた母と見合いの末、結婚。私達四姉妹が生まれました。

私は末っ子で、その時の父は貿易商として日本、中国の厦門・青島、海南島を行き来して、家には骨董品の数々で、台所には台湾人の料理人、子供達には一人一人にネーヤ（女中さん）が面倒を見てくれて何不自由のない生活でした。

昭和14年**第二次世界大戦**が勃発して、日本が戦果を上げると**提灯行列**で練り歩きました。戦争が激しさを増し、4年生の時はほとんど学校には行けず、家が**高雄港**の近くで、高雄港は軍港であったようで、この頃は朝の早くから空を覆うほどのB-29が顔が見えるほどの低空で港の方から飛来してくるのです。日本人は畳を道路に人の字に立て掛け、火をつけ煙幕を張り、その下を山に向かって走りました。近くの防空壕は直撃で無い状態で、それでも台湾は守りが堅剛で、それで沖縄本島に上陸したのだと子供の時、聞きました。

日本が降伏して程なく、大通りを**蒋介石**の軍隊が天秤棒に鍋釜等を吊して上陸して来たのには、子供心にも唖然としました。日本の七つ釦に長靴を履き、キリッとした進軍を見ていましたので。

終戦になり、強制的な**引き揚げ**が始まりました。全財産没収、持ち物は四季の衣類を三枚ずつ、お金一人千円だけで、高雄港にブロックごとに集合させられ待たされている間、暑いので倒れる子供を何人も見ました。引き揚げ船は米国の貨物船リバティー号、その船底にびっしりとつめ込まれ、もう吐くものがない状態で、食事は単板でお椀に薄いぞうすいが一杯で、私は食べた記憶が無いのです。

海の上にはまだ魚雷が浮いており、船は通りすぎるまで待つのです。やっと見た事のない日本の広島の大竹に着岸し、頭からDDTを吹きつけられて、そこから父の実家に帰るのに煤で顔が黒くなる列車に乗り、北野田の駅に着き、大美野のロータリーでひと休み、自分の荷物は自分でと言われ、10才の私は細く小さな身体をくの字に曲げて

徴兵制度
国家が国民に兵役義務を課して強制的に軍隊に入隊させる制度。日本では、1873年（明治6）発布の徴兵令に始まり、1945年（昭和20）に廃止。

第二次世界大戦
1939年（昭和14）から1945年（昭和20）にかけて、日本・ドイツ・イタリアなどの枢軸国とアメリカ・イギリス・フランス・ソ連などの連合国との間で行われた世界大戦。
一般的には特に欧州戦線を指し、太平洋戦線は太平洋戦争もしくは大東亜戦争と呼称される事も多い。

提灯行列
祝賀の行事などのとき、祝意を表すために多くの人が夜、火のついた提灯を持ち、列を組んで行進すること。また、その行列。

高雄港
台湾の高雄市にある港。第二次世界大戦中、連合国により爆撃された。

蒋介石
中華民国の政治家、軍人。

引き揚げ
日本の敗戦まで日本の植民地や占領地で生活をしていた一般日本人が、日本本土に戻されること。

DDT
身体や衣類に付着したノミやシラミなどの害虫を駆除する薬品。

耐えました。今でも大美野のロータリーを見ると胸が込み上げ、涙がにじみ出ます。両親の苦労は大変だったと感謝しています。私も母国に在りながらいつも**望郷の念**で台湾を想い出しているのです。

引き揚げ船 デッキから手を振る帰国者　写真提供：舞鶴引揚記念館

望郷の念
自分の家や故郷をなつかしく思う気持ち。

父の遺骨を抱いて

神奈川県 川崎市　津田 富貴　87歳
（代筆 小宮 征夫）

私の生まれ故郷は鹿児島県の薩摩川内市です。1945年、私が旧制の県立川内高等女学校に入学してまもなく沖縄が米軍に占領されて、毎日のように空襲警報が鳴りました。朝夕来るのは艦載機の**グラマン戦闘爆撃機**。編隊飛行して〝ピカピカ〟光り〝キーン〟という響きを出すのはB-29戦略爆撃機で〝どかん〟というのは爆弾が落とされた音です。

7月、川内市はグラマンの**空襲**を受けました。「防空壕に入ったら危ない。逃げやんせ」と、誰かが言ってきました。私と伯母が小さないとこたちを背負い、ほかのいとこ2人は手をつないで防空壕を出て逃げました。街は黒い煙に取りかこまれて爆弾が〝ビューッ〟**焼夷弾**は〝シュル、シュルッ〟と音をたてて降ってきました。**機銃掃射**の銃弾は足許の地面に突き刺さり、土ぼこりをあげていました。道路に伏せたり桑畑にかくれて山の麓の知人

グラマン戦闘爆撃機
アメリカ合衆国のグラマン社が開発しアメリカ海軍が第二次世界大戦中盤以降に使用した艦上戦闘機。

空襲
航空機から地上を爆撃したり銃撃したりすること。

焼夷弾
敵の建造物や陣地を焼くことを目的とした砲弾や爆弾。木造の日本家屋を効率よく焼き払うために使用された。

機銃掃射
機関銃の銃口を動かし、敵をなぎ払うように射撃すること。

宅へと走りました。

夕方、空襲が終わったら川内の街は焼け野原で、わが家は跡形もなし。防空壕の中の座布団が焦げて、くすぶっていました。大きな柿の木は焼けないで立っていたので、〝ホッ〟としました。朝からごはんを食べてなかったので、おなかがペコペコでした。祖父の実家へ避難を急ぐ途中、やけどで顔がくずれ、血まみれの人が倒れていましたが、私たちは助けてあげることができませんでした。川内川に架かる大平橋は大きな穴があいていて水の流れが見え、〝ぞおーっ〟としました。

1945年1月23日、フィリピンのルソン島で私の父が戦死したという「公報」が来ました。『玉砕を禁ず―比島カバルアン丘の死闘』（企画：戦史刊行会、白金書房）という本によると、父は第23師団歩兵71連隊の大盛支隊に所属していました。大盛支隊はカバルアン丘で「味方からは見捨てられ、敵からは言語に絶する鉄量攻撃をうけ、2週間の死闘」の後、「『全員玉砕を期して今から突撃する』と兵団に通報」その後「通信が途絶した」と書かれています。

父の遺骨を私が受け取りに行きました。白木の箱をかかえて家に帰る途中「コロン、コロン」と音がするので、祖母に「あけてみる」と言うと、びっくりした祖母は「富貴は業が強か」と言いました。白木の骨箱には小さな木切れしかはいっていませんでした。

ルソン島
フィリピン諸島のうちで最も面積の大きな島。1945年（昭和20）1月6日から終戦まで日本軍とアメリカ軍の陸上戦闘が行われた。

公報（戦死公報）
戦死の通知。国から役場などを通じて届けられた。

玉砕
玉が美しくくだけるように、名誉や忠義を重んじて、いさぎよく死ぬこと。旧日本軍では、戦闘に負けると判断すると、敵に突撃して倒されるか自決（自殺）を選ぶしかなかった。

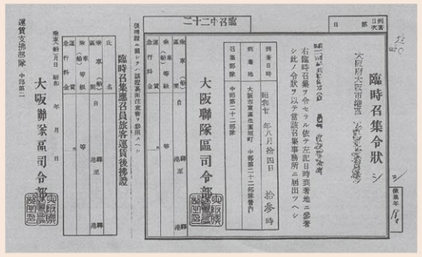
太平洋戦争では私の父のほか叔父2人が戦死。いとこは空襲の爆弾の破片で片足を切断され、別のいとこは食糧不足による栄養失調で死にました。

2016年8月15日、政府主催の全国戦没者追悼式に私は神奈川県の遺族を代表して出席、献花しました。私は2人の息子、5人の孫に恵まれました。亡き父に「今は幸せです」と報告しました。戦争は絶対駄目。孫たちに「赤紙」（召集令状）がくるような時代にしてはいけません。

日本兵の戦列 ルソン島（「横田隊写真帖」より）
写真提供：立命館大学国際平和ミュージアム

全国戦没者追悼式
日本国政府の主催で1952年（昭和27）以後行われる式典。第二次世界大戦の日本人戦没者に対して宗教的に中立な形で行われている。

赤紙
召集令状の俗称。用紙が赤いことからこのように言われた。軍隊に召集する命令文書。


赤紙　写真提供：大阪母親大会連絡会

「後は頼む」と残されて

兵庫県 尼崎市　喜連川 喜美枝　92歳
（代筆 川瀬 直美）

牛に鋤を引かせた田おこし

私が10才の時に**日中戦争**が始まりました。私には3人の兄がおり、長兄は20才ですぐに召集され中国大陸へ。次兄はまもなく徴兵され、戦争が長引くと三男の兄は16才で静岡の川崎軍需工場兼基地へ、**飛行兵**として召集されてしまいました。令状が届いた家はどこも扉を閉め、雨戸も閉ざしてしまいます。家の者のすすり泣く声が漏れないように。親も悲しみます。だって「息子が死にに行く」のですから。**非国民**と思われないように。ドラマの様な誇らしい姿などありませんでした。

男手を失った父は、毎日私に畑仕事をさせました。母は産後の肥立ちが悪いまま、2才と4才の妹を残し、兄たちに会うこともなく亡くなりました。この日の悲しみは忘れられません、12才でした。以来、田畑の仕事と家事、妹たちの世話と働き通しでした。当時は牛に鋤を引かせて田畑を耕していました。牛を先導する父の後ろで重い鋤を支えるのはたいへんで、小さな身体の私は一度気を失ってしまいました。きっと疲れ切っていたのでしょう。妹たちも山に入っては機械油になるからとドングリなどの木の実を集めたり、兵服を織る繊維の桑の木の皮を探したりしました。誰もが「日本は勝利する」と信じ、**銃後**の生活に耐えていました。学校で勉強する時間などありませんでした。もっと学びたかった。もっと本が読みたかった。負けず嫌いの私は、少しの時間を惜しんでは、家で勉強しました。また幼い妹たちに不自由な思いをさせないように、セーターやマフラーも編んでやりました。母親代わりとして奮闘する日々でした。

気の強い私ですが、号泣してしまったことがあります。終戦が見えていた頃でしょうか。父が「（三男が）**特攻隊**として出撃するから最後の面会に行く。わしは途中で空襲に遭うかも知れん。後のことはお前に頼む」と。ここ兵庫養父郡から遠い静岡へと向かいました。田畑と妹たちと牛を残して。母が逝き、兄たちが戻らず、父までもと思うと、涙は次々溢れ流れるままでした。17才でした。

まもなく終戦となり、奇跡が起きました。兄が三人とも無事に**復員**したのです。元から信心深い父は、朝夕のお勤めに加え、神社へ毎朝お詣りを欠かさず、無事を祈っていました。

日中戦争
1937年（昭和12）7月からほぼ8年間にわたった日本の中国に対する侵略戦争。現在の北京郊外で起きた盧溝橋事件をきっかけに全面戦争へと進み、1941年（昭和16）アジア・太平洋戦争に拡大した。

飛行兵
航空兵。軍隊における兵科の一つ。航空機を用いて攻撃・偵察を行い、それに伴う整備も受け持った。

非国民
第二次世界大戦時に、軍や国策に非協力的な者を非難する語として用いられた。

銃後
戦場の後方。直接戦闘に加わらない一般国民。

特攻隊
「特別攻撃隊」の略。第二次世界大戦で、旧日本陸海軍が体当たり戦法のために、特別に編成した部隊。爆装して敵艦に体当たりした航空特攻と、特殊潜航艇や人間魚雷などの海上特攻とがあった。

復員
戦時体制の軍隊の招集を解かれ、兵役を離れ、戻ってくること。

特攻の兄は出撃直前に終戦となり、長兄は左足を銃弾が貫通し、歩行が不自由ながらも生きて戻りました。私は汚れた包帯を毎日洗いましたが、兄から戦地の話を聞くことはありませんでした。戦死された方が多い集落の中で、自分たち三兄弟が生きて帰ったことを「恥ずかしい」と兄の口から何度か聞きました。

戦争のために兄たち、そして当時の若者は20代からの、自由な輝く時間を8年間も奪われ、心も身体も傷つき、命さえ捧げました。この方たちの尊い犠牲の上に今の日本があります。どうか忘れないでください。

（高齢のため、聞き取り代筆しました。喜美枝は伯母です。文中「2才の妹」は私の母です。）

出征時記念写真　写真提供：立命館大学国際平和ミュージアム
（写真は当時のものですが、ご寄稿されたご家族ではありません）